

## 常呂と熊野

### — 地域を繋ぐ試みとして —

東京大学文学部・大学院人文社会系研究科は、半世紀にわたって北海道北見市常呂町と地域連携協定を結び、「北海文化研究常呂実習施設」を基盤に、北東アジア考古学を中心とした研究や、博物館学実習等や展示による資料の公開、市民向け公開講座等地域に根差した教育活動を推進して参りました。さらに昨年からは、和歌山県熊野地方の中核都市新宮市とも地域連携協定を結び、「新宮分室」を設置、人文学の応用・活用による地域の文化振興に、院生・留学生研修＋若手フォーラム、教職員研修、東大人文・熊野フォーラム等を通じて、寄与する試みにも取り組んでいます。

今回の東大人文・熊野フォーラムでは、常呂と熊野という、一見何の関わりもなさそうな二つの地域を取り上げます。両地域について、人文学的観点から幾つかの共通トピックを抽出し、議論することで、例えば海上交通における関係性、通底する文化の特徴などが浮かび上がる可能性があるかと思っています。我が国には、文化や自然に恵まれながらも、少子高齢化や人口流出・過疎化等に苦悩する地域が少なくありません。そうした地域間に、人文学の叡智を傾注し、共通の人文学的課題を見出し、多少とも双方の文化振興に資することが出来ればと考えています。

想像力に富んだ造形物が数多く出土する古代オホーツク文化等の考古遺跡を数多く抱え、本学と連携して教育研究活動を展開されてきた北見市（旧常呂町）と、「熊野学」を地域振興の核に据えて20年以上活動して来られた新宮市との間には、人文学からみると、比較に値するトピックや事象が色々と見いだせるように思われます。人文学の応用・活用を通じて、異なる地域を繋ぐことにより、相互に文化的に活性化する新たな道を見出し、将来的には国内外地域連携ネットワークのようなものが構築できればと願います。